

外国人児童の言語的多様性を生かす実践

—外国人児童の母語を体験する活動の意義—

古川 敦子 内門 香代子 横田 こずえ

キーワード

外国人児童 言語的多様性 外国人児童の母語 多言語会話体験 関係性構築

要旨

外国人児童の教育においては、日本語指導や学校への適応指導の充実だけではなく、在籍学級の学習活動への参加が重要な課題となる。外国人児童が学級に受け入れられるためには、在籍学級の子どもたちとの関係性構築、外国人児童の文化的・言語的多様性の理解も必要だと考えられる。本稿で報告する実践は、外国人児童と在籍学級の児童との交流と相互理解の促進を目指して、外国人児童の母語での簡単な会話をクラス全員で体験する活動を日本語指導担当教員と在籍学級担任が協働で行ったものである。本稿では、まずその実践を計画した経緯と実践の内容を報告する。そして実践後の児童の感想、および担任教員に対するインタビュー調査から、本実践の目的の達成度を検証し、実践の意義と課題について考察する。

1 はじめに —外国人児童生徒⁽¹⁾の教育に関する施策—

国内における在留外国人数の増加を背景に 2019 年 6 月に「日本語教育の推進に関する法律」が公布、施行された⁽²⁾。この法律の基本的施策には、外国人等である幼児、児童、生徒等に対する日本語指導、およびその指導を担う教員に関する支援施策について国の責務として取り組むことが、以下のように記されている。

国は、外国人等である幼児、児童、生徒等に対する生活に必要な日本語及び教科の指導等の充実その他の日本語教育の充実を図るため、これらの指導等の充実を可能とする教員等（教員及び学校において必要な支援を行う者をいう。）の配置に係る制度の整備、教員等の養成及び研修の充実、就学の支援その他の必要な施策を講ずるものとする。

（第 3 章「基本的施策」第 1 節第 12 条）

これに先行して、2014 年には学校教育において「特別の教育課程」を編成して日本語指導を実施することが可能となり⁽³⁾、さらに 2020 年には外国人児童生徒等の指導を担う教員

の養成・研修のガイドブックも刊行された⁴⁾。その他にも、日本語指導のカリキュラムや就学案内などが国や地方自治体でも作成されている。このように外国人児童生徒を対象とした日本語指導と学校生活への適応指導の公的な体制作りは進みつつあると言えよう。今後取り組むべきことは、受入れの「質」の向上、つまり外国人児童が自分らしさを保持しつつ、学校・学級の一員として学校生活をともに送れるような環境を整えることだろう。

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』（文部科学省 2018）には、外国人児童に対する日本語指導に関して「学校生活への適応を図るとともに、外国における生活経験を生かすなどの適切な指導を行うものとする」と記されている（第 1 章第 4 「児童の発達の支援」 2 (2)）。この項目について『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編』（文部科学省 2018）では、外国人児童は「言語的・文化的背景、年齢、就学形態や教育内容・方法、さらには家庭の教育方針など」により 1 人 1 人が多様であることに言及し、「当該児童が自信や誇りをもって学校生活において自己実現を図ることができるように配慮することが大切である（下線は筆者による）」と書かれている。また、彼らの言語的・文化的多様性の生かし方や他の児童生徒の理解について、以下のように記されている。

帰国児童や外国人児童、外国につながる児童は、他の児童が経験していない異文化での貴重な生活経験をもっている。外国での生活や異文化に触れた経験や、これらを通じて身に付けた見方や考え方、感情や情緒、外国語の能力などの特性を、本人の各教科等の学習に生かすことができるよう配慮することが大切である。また、本人に対するきめ細かな指導とともに、他の児童についても、帰国児童や外国人児童、外国につながる児童と共に学ぶことを通じて、互いの長所や特性を認め、広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育てるよう配慮することが大切である。そして、このような相互啓発を通じて、互いに尊重し合う態度を育て、国際理解を深めるとともに、国際社会に生きる人間として望ましい能力や態度を育成することが期待される。

（下線は筆者による）

外国人児童生徒の受け入れの充実には、当該児童生徒が言語的・文化的多様性を「特性」として生かすこと、そして学校内の児童生徒が「共に生きる」者として互いに言語的・文化的多様性を認め合うことができる環境が必要である。では、そのために教員はどのような働きかけを行うことができるだろうか。本稿では、その 1 つの事例として、小学校で実施された実践について報告する。

2 外国人児童の母語を活用した実践の例

先述の「日本語教育の推進に関する法律」では、その基本理念の中で「幼児期及び学齢期にある外国人等の家庭における教育等において使用される言語の重要性に配慮」すること、つまり児童生徒の母語の重要性に言及している。母語・母文化の尊重は、当該児童生徒

本人だけではなく、教員やクラスの児童も理解していることが求められるだろう。

外国人児童の母語や母文化を活用した実践の先行事例として、内門・古川（2017）の実践と矢崎（2021）の国際理解教育の活動試案が挙げられる。

内門・古川（2017）の実践は、小学生同士が日常的によく使う簡単なフレーズを多言語で記載している教材『はなしてみよう』（古川 2017）を用いて、外国人児童の母語での会話を在籍学級で体験する活動である。この活動では、来日 3 か月の外国人児童を母語の「先生役」とすることで、児童同士のコミュニケーションの促進と第二言語で学ぶ外国人児童の気持ちの理解を目指している。

矢崎（2021）は、「学校教育現場においても『日本語指導が必要な児童生徒』に対して日本語や生活習慣等の習得をただ求めるだけではなく、マジョリティ側（日本）の子どもたちに対しても、文化的多様性を持つ「他者」との共生に向けた意識変容を促す、何らかの働きかけが必要となる」と指摘し、「身近な隣人の言語に光を当てる」ことを意識した国際理解教育の活動を試案として提案している。「フィリピン人児童 A 君」のいる学級を想定して作成されたこの試案の目的は、①A 君の日本で暮らした大変さに気づき、その気持ちに共感することができる、②A 君はフィリピン語を使って本当はいろいろなことができることに気づく、③A 君の言葉を自分たちが覚えれば、これから A 君ともっと近づくことができることに気づく、という 3 点である。

この 2 つの例は、以下の 4 点で共通していると言える。

- ・実践で使う言語を「外国語」ではなく「クラスの児童のことば」として捉えること
- ・外国人児童が「教える側＝情報を提供する側、支援する側」としての役割を持つこと
- ・クラスの児童の外国人児童の気持ちや立場への理解を目指すこと
- ・クラスの児童同士の交流を促すこと

本稿で報告する実践は、この 2 例の内容・目的を基にして計画され、2021 年 7 月に小学校 3 年生のクラスで実施されたものである。

3 多言語会話集『はなしてみよう』を使った実践

3-1 実践に至る経緯

3-1-1 日本語指導に関わる教員が感じていた課題

筆者の内門、横田は外国人児童の在籍が多い小学校（S 校）で教諭を務めている。S 校には日本語指導が必要な児童に個別指導を行う「日本語教室」が複数設置されており、横田は日本語指導担当教員の 1 人である。内門は以前の勤務校で日語指導担当教員の経験があり、S 校では特別支援教室の 1 つを担当している。S 校の地域には、有志の小中学校教員によって構成された日本語教育に関する研究班があり、内門と横田はその一員、古川はその研究班のアドバイザーとして参加している。

筆者らは、外国人児童の在籍学級での学習参加のしやすさ、日本語教室と在籍学級との連携の取り方について検討を重ねる中で、外国人児童と在籍学級児童との関係性構築に課

題を感じるようになった。S校は外国人児童の在籍数が多いため、学級内に外国人児童がいることが他の児童にとって「特別な状況」ではない。しかし、それゆえに当該児童生徒の母語や母文化の理解までは意識が向きにくく、「外国から来た子」「日本語が分からないから日本語教室で勉強している子」と捉えているにすぎないのではないかと推察された。実際、日本語教室に通級している児童の中には他の児童との関わりが薄いと感じられる児童もいた。

外国人児童が在籍学級での学習に参加していくためには、日本語の習得も重要ではあるが、他の児童とともに学び合える、助け合える環境が整っていることも必要な要件となるだろう。そのためにも外国人児童と学級の児童との関係性を深めるような取り組みをしたいと筆者らは考えていた。

3-1-2 本実践を計画するきっかけ

本実践は、S校の3年生の担任教員が横田に対し、ある外国人児童のことを相談したことがきっかけで計画された。その担任教員は、学級内のある外国人児童と他の児童との関係性が希薄であること、その外国人児童が自発的にコミュニケーションをとることが少ないことから、1学期終了前に「その児童がクラスで活躍できる場を作りたい」と考えていた。そこで筆者らはS校の3年生2クラスで、日本語教室に通級している外国人児童が「先生役」となって自分の母語を教える活動を提案した。活動内容の大枠は内門・古川（2017）を基にし、それに以下の2点を加えて計画を立てた。

- ・各担任教員と内門、横田のチームティーチングとして協働で実施すること
- ・実践後には児童に感想を書いてもらい、担任教員にもインタビュー調査を実施すること

1点目の教員のチームティーチングについては、各クラスで教員2名が協働で授業をすることで、児童にも日本語教室と在籍学級とのつながりが少しでも感じられるようにしたいとのねらいがあった。

2点目については、実践終了後には児童にワークシートを配付し感想を書いてもらった。担任教員へのインタビューは2学期に行い、実践後の児童の変容についても質問することとした。それぞれの回答は本実践の意義について検証するための資料として使用した。

3-2 実践の内容

3-2-1 実践の概要と対象児童

内門と横田は、S校3年生の担任2名（T1とT2）と協働で、1学期終了前の総合の時間を活用し、各クラスで外国人児童の母語の会話を体験する活動（実践①②）を行った（表1）。

表 1 実践概要

	実践日時	指導担当者	対象児童
実践①	2021年7月13日第1校時	内門・T1	J1（アジア出身）日本生育
実践②	2021年7月14日第4校時	横田・T2	J2（南米出身）2020年来日

対象となる外国人児童 J1、J2 は個別に日本語指導を受けている。2021年7月の時点では2人とも S 校の日本語教室に週3時間通級し、横田がその指導を担当している。

J1 は日本生まれ、日本育ちである。クラスには他にも複数の外国人児童がいるが、J1 と母語を同じくする児童はいない。日本語の会話には特に問題が感じられず、来学期からは在籍学級の学習にも十分に参加が可能だと考えられていた。

J2 は 2020 年度に 2 年生で来日した。3 年生の在籍学級には J2 と母語を同じくする外国人児童がいる。実践の時点での J2 の日本語は、いわゆる、たどたどしい状態であった。日本語教室では自分から話しかけることもあるが、在籍学級での授業ではあまり生き生きとはしていないように感じられた。また休み時間に 1 人で遊ぶ姿も観察された。

3-2-2 実践の指導案

本実践の指導案では、授業の視点と目的を以下のように設定した。

授業の視点:

外国人児童が日本語での学習や生活をする困難さを理解する場面において、外国籍児童の母語を使い交流することにより、外国籍児童の第二言語での学習や生活をする困難さを、日本語母語話者児童が理解できるようになるであろう。

授業の目的:

- (1) 外国人児童と在籍学級での交流の機会を増やすこと
- (2) 第二言語で学校生活を送ることの大変さを、在籍学級の児童が理解すること
- (3) 在籍学級の児童が、外国人児童のことを「日本語も○○語もできる子」というイメージで捉えられるようにすること

本実践では、教材として多言語会話集『はなしてみよう』（古川 2017）を使用した。この冊子は実践当日に 2 クラスの児童に配付された。

実際の授業の展開を表 2 に示す。実践①と②では、「つかむ」と「まとめる」過程において細かい相違点はあるが、大枠としては共通している。

表 2 実践の展開

過程	学習活動	支援及び留意点
つかむ	実践① 外国の人たちは日本で暮らしやすいか考える。	クラスや学校内にいる外国人児童のことなどを思い浮かべ、自分が外国で生活したらどうなるか想像させる。
	実践② 「言葉の話せない外国に住むことになった」と想定し、どのようなことを思うか考える。指導者 2 人が、児童の母語を使って会話をしてみせる。	想像したことをワークシートに記入する。実際に体験したことがある児童に発表してもらおう。
追求する	(実践①②共通) 外国人児童の母語での会話を体験する。 ・外国人児童が先生役となる。 ・「はなしてみよう」を使い、各自が言ってみたい会話を選んで練習する。 ・各自練習した会話を、外国人児童と練習する。	対象児童だけではなく、その他の外国人児童の母語も体験してもらおう。
まとめる	(実践①②共通) 外国人児童の母語を使った感想をワークシートに書く。 実践② (可能な児童は)感想を発表する。	外国人児童の母語を使ってみてどう思ったか感想を書くように言う。 外国人児童について感じたことも感想に入れられるように声がけする。 友達の感想を聞くように促す。

3-3 実践の様子

3-3-1 実践① (内門と T1 による実践)

実践①では内門が主に活動を進め、担任教員 T1 は板書や補足説明などを担当した。

内門は、S 校には特別支援の教室も含め、複数の支援の教室があるということから話を始め、「日本語教室」がどのようなクラスか児童とやり取りをしながら説明していった。その後「みんなが外国に行ったとしたら、どうやって生活できるかな」と問いかけ、さらに日本にいる外国の人の暮らしやすさについて考えるように進めた。そして児童に「これを見ると J1 さんのことばで話ができるよ」と『はなしてみよう』を配付した。

実践中、クラスの J1 以外の外国人児童の 1 人が「私も**語 (その児童の母語) ができる」と自主的に申し出たため、その児童にも先生役になってもらった。実践①では 2 つの言語での会話練習となった。

3-3-2 実践② (横田と T2 による実践)

実践②では横田と担任教員 T2 が主たる指導の役割を交代しながら進めていった。T2 は先生役になる児童のために「先生」のネームプレートを準備していた。

このクラスには対象児童 J2 と母語を同じくする児童が他に 2 人在籍している。その 2 人は日本語教室には通級しておらず、常時在籍学級で学習をしている。「追求する」の過程では J2 より先にその活発な 2 人が先生役を申し出た。一方、J2 は控えめであり、母語使用に自信がなさそうな様子で、最初は先生役になることに戸惑い、クラスの前に出ることを

躊躇する様子が観察されたが、途中から先生役として活動に加わった。

4 本実践に関する児童の感想

4-1 クラスの児童の感想

実践①②終了後、各クラスで授業の感想を書くワークシートが児童に配付された。2クラスの児童の感想をまとめると「外国語の会話体験の楽しさ・面白さ」「外国語の会話の難しさ」「外国語学習への意欲」「多言語・多言語話者の存在への気づき」「多言語話者である児童への敬意」「第二言語環境の大変さ」「異なる立場への推察」の7つのカテゴリーに分けられた。表3に、7つのカテゴリーとそれぞれの児童の感想例を示す。

外国語の会話を体験したことに関する感想は、カテゴリー(i)と(ii)にまとめられた。本実践で新しい言語表現を知った嬉しさがある一方、その言語の発音の難しさへの言及があった。使用教材にはカタカナで発音が記されているが、先生役の児童が話す実際の発音とは違うことに気づき、難しさを感じたのではないかと思われる。カテゴリー(iii)には、本実践の継続の希望や、言語学習への興味関心に関する感想がまとめられた。

児童が本実践から得た「気づき」と言える感想は、カテゴリー(iv)(v)(vi)にまとめられた。カテゴリー(iv)は、本実践で英語以外の外国語に触れたことにより、世界に多くの言語が存在すること、自分達の身近なところに日本語以外を母語とする人々がいることに改めて気づいたという感想である。カテゴリー(v)は、この実践で「先生役」を務めた児童に対して「よかった」「ありがとう」とその役割を評価する感想に加え、児童が複数の言語を使えることや、自分の母語以外の言語で学校生活を送っていることへ敬意を示す感想も含まれた。カテゴリー(vi)には、第二言語で学校生活を送ることに関して「大変だなあ」と感じている感想、外国人児童の来日時の気持ちを推察するような感想がまとめられた。

最後に、カテゴリー(vii)には、「もし私が違う国にいったら」と自分がその地域の母語話者以外になる場合を仮定して書いているものをまとめた。その地域の言語が話せない場合、「しゃべれなくておこりそう」「1人ぼっちになっちゃう」「ぜったいにべんきょうができないと思います」など、否定的な感情になることを想定している記述が多かった。

表3 クラスの児童の感想まとめ⁽⁵⁾

カテゴリー名	児童の感想の例
(i) 外国語の会話体験の楽しさ・面白さ	<ul style="list-style-type: none"> ・「たのしかった」「おもしろかった」 ・「**語が知れてうれしかった」 ・「ありがとうは女の人と男の人にいう方がいい方がちがうそうです。そんなの知らなかったけど知れてうれしかったです」 ・「[外国人児童の母語の表現]→いいよ、をおぼえました」
(ii) 外国語の会話の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・「むずかしかった」「とくに**語がむずかしかった」 ・「言いつらかった」 ・「はつ音がむずかしくていえなさそう」
(iii) 外国語学習への意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・「またこのべんきょうをしたいです」 ・「こんど[外国人児童の母語の表現]と言ってみよう」 ・「わたしが[J1のルーツがある国]に行ったら、J1さんや*さんみたいに、すらすらいえるようになりたいと思った」
(iv) 多言語・多言語話者の存在への気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・「国によってちがう言葉があるんだなと分かった」 ・「いろいろな国の言葉があっていいなと思った」 ・「すごくむずかしい外国のことばがあるんだな—と思いました」 ・「S校にもいろいろな外国人がいるんだと思った」 ・「このクラスにもいろいろな言葉を使っている人がたくさんいるんだと思いました」
(v) 多言語話者である児童への敬意	<ul style="list-style-type: none"> ・「はつおんがたいへんだったけど、ミニ先生のおてほんがとても上手だった」 ・「*さんとJ2さんと*さんたち、とてもうまかったです。ありがとうございます。[「ありがとう」を示すJ2の母語表現]」 ・「J1さんや*さんは日本語や国の言葉もしゃべれてすごいな」 ・「ちがう国のことばでお話しするなんてすごいとおもった」 ・「J2さんたちは日本語はむずかしいのにがんばっているのがとってもすごいなと思います」
(vi) 第二言語環境の大変さの推察	<ul style="list-style-type: none"> ・「J1さんが日本に来たときに、大変だなあと思った」 ・「ほかの国の人も日本語を話せるようになるのはたいへんだし、日本人がちがう国の人のことばをしゃべるのもたいへんなので、どちらも大変だなあと思いました」 ・「日本人も外国のことばをおぼえるのもたいへんだけど、外国人にとってもにほんごをおぼえるのたいへんだとおもった」
(vii) 異なる立場への推察	<ul style="list-style-type: none"> ・「きょうのじゅぎょうで感じたことは、もし自分が外国にいてべんきょうをしたら、ぜったいにべんきょうができないと思います」 ・「わたしがもし外国の学校に行ったら、わたしはしゃべれなくておこりそうです」 ・「外国の言葉がわからないから友だちができなくて、1人ぼっちになっちゃうと思う」

4-2 対象児童 J1、J2 の感想

実践①の対象児童 J1 は、感想に「いつかみんなと日本語みたいに [J1 の母語] をふつうに、しゃべりたいな、と思いました」と書いている。普段 J1 はクラスの児童と日本語で会話しているが、自分の母語で自由に話したいという望みを持っていることが分かった。実

実践①のクラスには、先生役にならなかったもう 1 人の外国人児童が在籍している。教員に勧められても先生役としてクラスの前に出なかったため、その児童の母語は実践①では取り上げられなかった。しかし、その児童の感想にも「みんなと [自分の母語] をしゃべりたい」と書かれていた。

実践②の対象児童 J2 は、最初躊躇していた先生役に途中から参加したが、感想には「たのしかた。またやりたい。みんなにおしえてうれしかったです (原文ママ)」と書いている。実践①で J1 とともに先生役を務めた児童も「みんなが [自分の母語]、[J1 の母語] をおぼえてくれたので嬉しかったし、楽しかったです」と書いており、自分の母語が使われたことの嬉しさ、楽しさを表現していた。

5 担任教員へのインタビュー調査⁽⁶⁾

5-1 担任教員 T1 の対象児童 J1 に関する語り —実践①の様子とその後の変容—

実践①を内門とともに行った担任教員 T1 に対し、実践①における J1 の様子、そしてその後の変容について、2021 年 9 月 10 日に Zoom を使ってインタビューを行った。

T1 によると、J1 は「普段の授業の中でも時々発表はする」が、今回は事前に J1 が先生役になって実践①をすることが伝えられていたので、「(実践①をすることに) 自信を持っていたと思いますね、自分がこういうのが分かるっていうのと。」と述べている。また、実践①での印象的な出来事として、使用教材にある表現とは異なる表現があることを J1 がみんなに伝え、黒板に書いて示したことを挙げている。

T1 の語り (1) 実践①での J1 の活躍

特に見ていて感じたのは、あの冊子 (『はなしてみよう』) の中にあった言葉と、実際 J1 さんの発音がちょっと違うのがあって、そんなふう言うんだね、っていうのが(わかった)。[中略]日本の方言じゃないですけど、いろいろな言い方があるのかもしれないな、本当に生の言い方、ここで聞けてみんなよかったね、みたいなところで J1 さんが活躍できたかなって。

また、この時のクラスの児童について「そんな言葉に触れる機会がまずないですから、『えーっ』っていう、とてもうちのクラスは穏やかで素直な子が多くて、『ふーん』っていう感じで『じゃあ、書いところ』みたいな感じで。」と述べている。これまでもクラスの児童は J1 には翻訳付きの通知が配付されるのを見ているので、J1 が日本語以外を母語とすることは知っていたが、実際に J1 が母語を使う場面を見たことで、その認識を新たにすることがあがる。

さらに、T1 は 2 学期以降の J1 の様子について、「大きく変わったっていうのはないんですけども、ちょっとやっぱり自信を持ったのかなと思う場面がいくつか (あった)」と述べ、例として 2 つの場面を挙げている。

1 つ目は J1 の得意なことを活かしたクラスの係の仕事をするようになったことである。

T1 の語り (2) J1 のクラスの「ICT 係」

2 学期が係活動 2 つあって、〈中略〉 J1 さんはタブレットとか、そういったものがすごく得意なんですね。〈中略〉私が苦手なので、電子黒板とかも「あれ？これどうやるんだろう？」とか言うと、J1 さんが教えてくれるんです。J1 さんは「ICT 係」っていうのに入って。〈中略〉 J1 さんは、そこを生き生きとやってくれてるのが 1 つ。

2 つ目は国語の「ポスターを比べよう」という単元で、資料として使ったポスターに J1 の母語が書かれており、その意味をクラスの前で伝えられたという場面である。

T1 の語り (3) 国語授業での J1 の母語の活用

ポスターって何っていうところで、電子黒板にネットから引っ張ってきたポスターをいくつか私が出したんですね。〈中略〉そこに文字が、何かが書かれていたんだけど、私に分からなかったんです。そしたら J1 さんが「先生、これは兵隊さん募集の〈中略〉そういうポスターなんだって教えてくれて。「え、そうなの」って。「J1 さん、すごい」って、またそこで「すごい」ってなって。

T1 は、実践①の授業をきっかけにクラスの児童が「J1 さんは私たちにわからないことが分かる」と感じるようになり、J1 も自分が他の児童に認められているとわかったのではなにかと述べている。

T1 の語り (4) クラス児童の J1 の捉え方の変容

J1 さん自身、〈中略〉(クラスで)疎外されていた子ではないんですけど、でも、J1 さんのよさっていうのは、そんなにみんな感じてなかったかな。だからその授業をきっかけに、J1 さんだけがわかるみたいなところもあるし、J1 さんもそこに自信を持ったところがあると思います。

5-2 T2 の J2 に関する語り —実践②の様子とその後の変容—

実践②で横田とともに活動を行った担任教員 J2 に対し、実践②における J2 の様子、そしてその後の変容について、2021 年 11 月 8 日に Zoom でインタビューを実施した。

T2 は「J2 がクラス内で活躍できるようにしたい」という期待を持って実践②に臨んだが、J2 が思ったよりも活動参加に消極的に見え、最初は「先生役」として前には出なかったこと、また J2 が母語の使用に自信がなさそうに見えたことなどから、「(J2 の状況を)見間違えた」と捉え、期待通りには J2 が活躍できなかったと考えていた。

T2 の語り (1) 実践②のねらいの未達成

J2 さんの活躍をベースに考えていったんですが、そのねらいは大外れだったかなって感じがします。やっぱり本人の〈中略〉、**語(J2の母語)力のリサーチと、あとは本人の、今の、そのときの、クラスの前に出て何かしゃべるって人間関係の構築のレベルを私が見間違えまして、やっちゃまったなって思ったんですけども。でもそこでちょうど、うち(のクラス)、**語をしゃべれるのが、〈中略〉その子たちがうまく回してくれて活躍してくれたので、〈中略〉「他の文化があるんだよ」って言うことを知ってということとか、「他の言語を学ぶって結構大変だよ、結構難しいよね、そう簡単にはしゃべれるようにならんよね」って話ってするのは、割と子どもたちとしては、「そうだな」っていうふうに落ちた授業だったかなって感じがします。

T2にとって実践②は思うような成果が見られなかったと捉えられていた。J2の変容が見られるようになったのは、実践②の後、1学期の最終日に行なわれたクラスの「お楽しみ会」以降と考えている。J2は1学期のある時、授業内でクラスの児童が大爆笑するような「笑いをとった」経験があり、そこからT2は「本人が他の人とコミュニケーションをとる様子が多く見られるようになってきたかな」と語っている。その後、お楽しみ会の前に「お笑いを日本語でやりたい」とT2に申し出て、他の児童2人とトリオで漫才に挑戦した。その頃からクラスの児童のJ2に対する捉え方も変わってきたと述べている。

T2 の語り (2) クラスの児童のJ2の捉え方の変容

(クラスの児童は、J2が)しゃべれないって認識でいたと思います。日本語が分からない、今勉強中だ。だから発表とかもできないんだって認識でいたと思います。〈中略〉(11月も)あまり大きくは変わってないと思いますが、「なんかあいつ、明るいやつらしい」って追加されていると思います。〈中略〉多分、あんまり子どもたちはJ2さんの日本語力は、気にしてないと思います。「日本語力が向上したぞ」ってみんなに思われてるっていうよりは、「なんか明るいやつだぞ」って思われてるってほうが、印象としては強いです。

T2 の語り (3) J2のコミュニケーションの変容

(J2は)自分から話しかけるっていうことが、1日にほとんどっていうか、4月は皆無ですかね。ゼロだったので。〈中略〉最近、よくしゃべるので。〈中略〉友達としゃべるっていうか、〈中略〉単語とか、人の名前を呼んで何か動作で試みてコミュニケーションとるってことが多いんですけど、本人からコミュニケーションをとろうとしてるっていうのが大きい変化かなって感じがします。

T2から見ると、J2のことは日本語も母語も目立った伸びは感じられないものの、クラスの児童との関係性やコミュニケーションの取り方などには明らかな変容があったと考えられている。

6 まとめと考察 一本実践の意義と今後の課題一

ここでは3-2-2に示された本実践の目的が達成されたかについて、4の児童の感想と5の担任教員の回答をもとに考察する。そして本実践の意義と今後の課題について述べる。

(1) 外国人児童と在籍学級での交流の機会を増やすこと

実践①後の担任教員 T1 の語りから、J1 とクラスの児童とのコミュニケーションが増えつつあることがわかる。J1 が在籍学級内で自信を持って発言する場面も見られ、自分の得意分野に関する ICT 系の活動も「生き生きと」行っている。一方で、J2 に関しては、2 学期にクラスの児童とのコミュニケーションが増えたものの、それは実践②がきっかけではなく、「お楽しみ会」等での経験によると考えられる。J2 にとって母語より「お笑い」のほうに興味関心が強く、「みんなの前でやってみたい」と思えるものだったのだろう。外国人児童の「特性」が必ずしも「母語・母文化」のみとは限らず、その児童生徒の興味関心や意欲を喚起するものを、まずは教師が注意深く観察していくことが必要であった。

(2) 第二言語で学校生活を送ることの大変さを、在籍学級の児童が理解すること

4-1 の表 3 (vi) に「第二言語環境の大変さの推察」としてまとめられた児童の感想を見ると、母語以外の言語を使用することの大変さが在籍学級の児童に伝わっていることがわかる。外国語の実際の発音を聞いてその難しさを感じたこと、また「私がおもい違う国に行ったら」と別の立場に立ってその困難さを考えたことで、現に J1 や J2 はその難しさ、困難さに日々対峙しているのだと気づいたのだろう。

(3) 在籍学級の児童が、外国人児童のことを『日本語も○○語もできる子』というイメージで捉えられるようにすること

J1 に関しては、実践①でも他の児童から 2 言語が使用できることを認められており、さらにそれが 2 学期にも継続されていることがわかる。J1 にとっても「母語ができる」ことが自信となっていることがうかがえる。J2 は、実践②では T2 が想定したような活躍とは異なったが、児童の感想には J2 が 2 言語を日々使用していることを認めるものや、実践②で先生役を務めたことへのお礼のことばなども見られた。実践②だけが影響しているとは言えないが、J2 についての他の児童の捉え方も、単に「日本語がしゃべれない子」というイメージから変容していると考えられる。

以上のことから、本実践では当初設定した目的がおおむね達成でき、児童同士の交流促進と、外国人児童に対する理解促進という意義の一端は認められたと言える。さらに、4-1 の表 3 (iv) に示すように、本実践によって在籍学級の児童が「多言語の存在に気づく」「多言語背景を持つ児童が身近にいることに気づく」という点でも意義があったと考えられる。

それでは、J2 のように自分の母語の使用に自信が持てない児童にとって、本実践はどの

ような意義があったのだろうか。確かに J2 が「母語を教える」という活動は想定通りにはいかなかった。しかし、自分の母語が学校の授業で取り上げられたこと、そして他の児童がその言葉での会話に挑戦したことから、「自分のルーツであることばをみんなが尊重している」ということは伝わったのではないか。現在、母語に堪能ではない児童生徒もいると思われるが、そのような児童生徒にとっても本実践のような活動は児童が「母語を大切にすること」を改めて感じるきっかけになるのではないかと、筆者らは期待している。

しかしながら、外国人児童生徒の「特性」をその多言語・多文化背景のみに捉えることは再考する必要があるだろう。児童生徒同士の交流や相互理解の促進には何が糸口となり得るのか、その児童生徒の強みや良さ、興味関心などを注意深く捉え、それらを学級での実践にどのようにつなげるか考えていくことが今後の課題である。

注

- (1) 本稿に記す「外国人児童生徒」とは外国にルーツやつながりをもつ児童生徒を指し、日本国籍を保持する児童生徒も含める。「外国人児童」も同様である。
- (2) 文化庁「日本語教育の推進に関する法律の施行について（通知）」（令和元年 6 月 28 日）
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html
- (3) 文部科学省「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）」（平成 26 年 1 月 14 日）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1341903.htm
- (4) 日本語教育学会（2019）『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』
- (5) 個人名や特定の言語名が書かれていた場合は、「*」や括弧書き [] で示している。
- (6) インタビューの回答に関する筆者の補足を括弧書き（ ）で示している。

参考文献

- 内門香代子・古川敦子（2017）「外国人児童の母語を使った在籍学級児童とのことばの交流ー多言語会話教材『話してみよう』を使った実践ー」子どもの日本語教育研究会第 2 回研究会配付資料 <https://www.kodomo-no-nihongo.com/archive/index/page:2>
- 古川敦子（2017）「多言語会話集『はなしてみようーきになるあの子となかよくなるー』の作成ー外国人児童の在籍学級への受け入れと交流促進を目指してー」『共愛学園前橋国際大学論集』17、147-155
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』
- 矢崎満夫（2021）「複言語環境の学級における国際理解教育ー言語意識教育からの示唆ー」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』6、51-60

付記 本研究は JSPS 科研費 18K02573 の助成を受けたものである。

謝辞 本実践にご協力いただきました先生方、児童の皆さんに心より御礼申し上げます。

Abstract**Practical Report to Harness the Linguistic Diversity of Foreign
Children:
Significance of Activities Involving Experiencing Foreign Children's
Native Language**

Atsuko Furukawa / Kayoko Uchikado / Kozue Yokota

When educating foreign children, it is necessary not only to provide them with sufficient Japanese language instruction and guidance on how to adjust to school in Japan, but also to include them in classes and have them participate in learning activities. Therefore, it is considered necessary to build relationships between the foreign children and the children in the class, and further to acknowledge the cultural and linguistic diversity of the foreign children in the class. The practices reported in this paper were carried out based on collaborative efforts between the Japanese language teachers and the homeroom teachers, in which the entire class experienced simple conversations in the native language of the foreign children with the aim of promoting interaction and mutual understanding between the foreign children and the children in the class. This paper reports on the process of planning these practices and the contents of the practices, verify the degree of achievement of the objectives of the practices through the children's impressions after the practices and interviews with the homeroom teachers, and examining the significance of and issues related to the practices.